

『源氏大鏡』三類本 本文と校異（三）若紫一花宴

田坂，憲二
福岡女子大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10455>

出版情報：文献探究. 17, pp.33-41, 1986-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



『源氏大鏡』 三類本 本文と校異

(三) 若紫—花宴

田坂愚二

三 若紫

源氏わらはやみにわつらひて、たへかたくおほしたり、有人申やう、
 北山のなにかし寺といふ所に、やかてましなひとむらひしり侍る。
 し、こながしめまはあやにくに侍ると、とくこそこころみせ給は
 め、と申けり、めしにつかはしたれば、老かままりてむろの戸にも
 出侍らぬよし申たれば、忍ひてかの寺へおはします。山ふかく入も
 ておはするまに「33」霞のたすまるもおかしくみゆ、三月つ
 こもり也けり、京の花はみな散ぬるを、山のさくらほまたさかりに
 て、いみしくおもしろし、寺のさまもいとあはれ也、みねたかく木
 ふかき岩の中に、ひしりはるたりける、のほりたまひて、御から
 まいり、さるへきふつくりてすかせたてまつるに、その日はおこら
 せたまはず、こよひはかりはとまり給ひて、猶しつかにかちなど
 ま参りていてさせ給へ、とひしり申せば、とまり給ふ、つれ／＼に
 て、しり／＼の山に立出て京のかたを見やり給へは、はるかに霞わた
 りて、四方の木すえそこはかとなうけりわがみむ、たれるほど、
 絵に似たり、御心ちをなくさめたてまつらんとて、御ともの人／＼

にしの国の名所とも、又ふしのやまなにかしのたけなど、
 にかたりきこえたり、其時、はりまのあかしのうらこそ、なほのい
 たりふかきくまはなけれど、たうみのおもてを見わたすほど、
 をひかなる所なれ、と申、つるてに、かのくにのさきの
 かみ、しほちのむすめかしたつきたる事、かたちもよき様など、かた
 り申たり、これにてきをき給ひしなり、又なにかしの僧都とほん
 にあるも、なにかしの寺おなし事也、名をさし、時代をあら「34」
 はさしと、かやうにつくりけんとおほゆ、つらおりの下に、小柴
 かきゆへあるさまにしなして、よしあるすまるしたる、そこの僧都
 の二とせにもれる坊なりける、源氏、これみつばかり御ともにて、
 おりてかいまみ給へは、ゆへ／＼しきあま君、又おとなしき女房あ
 また有、おとなき子どもの出入てあそぶ、中に十はかりなる姫君の、
 かみはあふきをひらけたらんやうにゆらくとして、いはけなくか
 いやりたるひたいつき、まゆのうちけふりたるさまなど、らうたけ
 においさまゆかしくみゆる人さまなり、此かたちの、藤つほのか、
 やく「35」日の宮によくにたまへる物かなと、まもらせ給ふにも

- (1) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (2) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (3) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (4) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (5) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (6) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (7) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (8) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (9) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (10) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

- (14) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (15) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (16) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (17) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (18) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (19) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (20) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (21) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (22) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (23) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (24) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (25) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

泪をおつる。かほあかくすりなしてたてり。すゝめのこゝろにせこの
 したにこめたりしを、いぬまかにかしたるとて、くちおしく思へり、
 からすなともこそみつくれ、といひてたちてゆくは、この姫君のめ
 のとなるへし、あま君はなやましけにて、けうそくにきやううちを
 きてよみたり、こちやとのたまへは、おさなき人もついでたるま。
 かみをかまなだ、をのれかけふあすもれらぬとは何ともおほほとて、
 雀の子したひ給ふよとて、尼君、おひたむありかもしらぬ若草を
 をくらす露そきえん、空なき、おとなしくゐたるおとな、初
 草のおひ行すもしらぬまにいかてか露のそえんとすらん、といふ
 さまともを見たまふに、そゝろにあはれなり、かくてこのさうつの
 坊へ源氏を入たてまつりたり、あま君のる給へるまもちかければ、
 ひやうふとすこしひきあけて、あふまとならし給ひて、出たま人に、
 源氏、はつ草の若葉のうへを見つるより、衣ねの袖も露そかはかぬ、
 御返尼公、枕ゆふこよひはかりの露のさそみ山の苔にくらへさらな
 む、法花三昧おこなふ、多灘の音にひきあひたるを、源氏、ふま
 まよふ、36才、み山をろしに夢さめてなみたもよほす灘の音、僧
 都、さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさほきやはすま、
 僧都は御くた物谷のそこまでほりもとめて御かはらけまい
 り給ふ、源氏、宮人にゆきてかたらん山桜風よりまきに來てもみま
 へく、僧都、うとんけの花まらえたる心ちしてみ山さくらにめこそ

- (28) 諸本と (29) 給へり (30) け (31) 諸本、て、 (32) 給
- (33) 給ふ (34) 十シ、 (35) 取けき (36) 時、 (37) 時 (38) 十シ
- (39) 十シ

うつらね、ひしり御かはらけ給て、おく山の松の戸ほそままれにあ
 けてまた見ぬ花の顔をみるかな、ひしり御まもりにとて、とこたて
 まつる、僧都は、しやうとく太子のふくらくよりえ給へ
 り、けまこんかうしのすゝの珠のさうそくしたるま、かの園
 より入たる箱のからめいたると、すきたるふくろに入て五えうのえ
 たに付て、又御くすりともるりのつほに入て、藤さくらにつけて、
 所につけたる御さくり物也、姫君の御かたへ、源氏、夕まくれほの
 かに露の色を見て今朝は、すみのたちそわつらふ、御返尼君、まこ
 とにや花のあたりはたちうきとかすむる空にけしきをもみん、京よ
 り御むかひのかんたちめ、てん上人あまた参り給へり、そのはわた
 りの山がつまで、さまへまものとも給る、いみじき花の本にしはし
 もやすらふ、ましき事を、人／＼はくちおしかりて、いはか
 くれの音の上になみ給ふ、おちくる木の心はへなど、ゆへある灘
 のもと也、とうの中持、ふところなる笛とりいて、ふま給ふ、僧都
 ことをみつかつら源氏へもてまいりて、御手ひとつあそはして、山の
 鳥さもおとろかし侍らん、と申給ふ、すこしひきならしてたち給ぬ、
 僧都もなき給ひて、五つのにこりふかき世に、なにしにむまれ給け
 ん、かはかりの御ありさまにて、と思ふにかなしき、との給、この
 おさなき人も、そのうちはひいなをつくとて、源氏の中持と名
 付ては、よき衣きせて、かしつき給けり、さて京へおはしま

- (39) 十シ (40) くだらく (41) たらく (42) すみ
- (43) 諸本、花 (44) に (45) 十シ (46) また (47) ち
- (48) 十シ (49) 十シ (50) たりける (51) 給と
- (52) なにかしに (53) はかり (54) も (55) つくりても
- (56) 給へり

しても御又有 源氏 おもかけは身をもはなれぬ山桜ころろのかき
 りとめてこしかと 御返尾公 あらしふく尾上のさくらちちめまこ
 ころろとめけるほどのはかなさ 三日ありて、これみつをつかは
 し給へり、ゆくこの御事は、なごさりと聞きこえしに、ふりはへさ
 せ給へる事を、そうつちかしこまり申給、此姫君の母は備都の御め
 いなり、御ちちは、藤つほのかくやく日の宮の御めに、せんたいの
 式部卿の宮の御むすめなり、さるによりて藤つほの御めいなれは、
 よく似給へま也、御ふみはこまか、にて源
 氏 あさか山あさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなまらん
 北山の尾公より、此姫君はまたなにはつをたにつ、け侍らぬと
 あまは、源氏より、た、そのななちかきみまほしきとの
 御返あま君、汲そめてくやしとき、し山の井のあ
 さきながらやかけをみす、御としまたおさなけれども、うけ
 ひき給はぬもことほり也、此藤つほの女御なやみ給ひて、まかて、
 御里におはしけり、源氏は、かやうのひまにたにと、ころろもあく
 かれまどひて、御心しりにて御えなとつたへ申女房、王命婦と「お
 う、いふと、せめありき給ふ、いか、たはかりけん、わりなくてみ
 たてまつり給ふほとさへ、うつともおほえ給はず、くらぶの山に
 やとりもとらまほしけ也、引哥、こよひたにくらぶの山に宿もみな
 暁しらぬ夢やさめぬと、源氏、みても又あふ夜まねる夢のうち

- (1) 十シ
- (2) 形テ侍書ス
- (3) 本の給ふ
- (4) 見ま
- (5) 御身
- (6) こと
- (7) 御心
- (8) 御返
- (9) 御返
- (10) 御返
- (11) 御返
- (12) 御返
- (13) 御返
- (14) 御返
- (15) 御返
- (16) 御返
- (17) 御返
- (18) 御返
- (19) 御返
- (20) 御返
- (21) 御返
- (22) 御返
- (23) 御返
- (24) 御返
- (25) 御返
- (26) 御返
- (27) 御返
- (28) 御返
- (29) 御返
- (30) 御返
- (31) 御返
- (32) 御返
- (33) 御返
- (34) 御返
- (35) 御返
- (36) 御返
- (37) 御返
- (38) 御返
- (39) 御返
- (40) 御返
- (41) 御返
- (42) 御返
- (43) 御返
- (44) 御返
- (45) 御返
- (46) 御返
- (47) 御返
- (48) 御返
- (49) 御返
- (50) 御返

やかてまきさる、我身ともかな、とむせかへり給ふもさすかにいみし
 くて、藤つほ、世かたりに人やつたへんたくひなくうき身をさめぬ
 夢になしても、はかなけにのたまふさま、なつかしうらうたけなれ
 は、なとかはなのめなる所たにましり給はぬと「引哥、かへりては
 うらめしくおもひ聞え給ふ、かやうのまきれに、山寺へはひさしく
 とつれ給はぬと、うはの尾尾京の御家へかへり給へると、これみ
 つ申せは、源氏たちより給へり、なやましさまさりて、あま君はた
 いめんなし、この姫君、こえはいとうつくしけにて、うは君に、源
 氏の中持おはしたり、見給ひて心ちなやましさなくせみ給へ、との
 たまふ、こえ、ものこしにきこゆ、かへりたまひて御えつかけたま
 ふ、源氏、いはけなきたつの「こえき、しよりあしまになつむ舟そ
 えならぬ、とかくのたまふとも、こひ、と
 て、藤つほのこひしきなくさみにみん、とおほしけり、手につけて
 いつしかも見えむらさきのねにかよひけし野への若草、此哥ゆへ、
 巻も姫君とも紫と名付たり、引哥、むらさきの一本ゆへにむさし
 の、草はみながらあわれとそみる、藤つほの御めいなれ
 は、ゆかりのむらさきなり、かくあま君九月にかくれ給にけり、源
 氏あはれにとふらひ給ふ、さてのち、源氏、あしわかのうらにみる
 めはかたくともこはたらなからかへる浪かは、御返、少納言君、
 よる浪の心もしらてわか浦に玉もなひかん程さうき

- (1) 十シ
- (2) 形テ侍書ス
- (3) 本の給ふ
- (4) 見ま
- (5) 御身
- (6) こと
- (7) 御心
- (8) 御返
- (9) 御返
- (10) 御返
- (11) 御返
- (12) 御返
- (13) 御返
- (14) 御返
- (15) 御返
- (16) 御返
- (17) 御返
- (18) 御返
- (19) 御返
- (20) 御返
- (21) 御返
- (22) 御返
- (23) 御返
- (24) 御返
- (25) 御返
- (26) 御返
- (27) 御返
- (28) 御返
- (29) 御返
- (30) 御返
- (31) 御返
- (32) 御返
- (33) 御返
- (34) 御返
- (35) 御返
- (36) 御返
- (37) 御返
- (38) 御返
- (39) 御返
- (40) 御返
- (41) 御返
- (42) 御返
- (43) 御返
- (44) 御返
- (45) 御返
- (46) 御返
- (47) 御返
- (48) 御返
- (49) 御返
- (50) 御返

きたる。風吹あれけしき夜は、源氏、むらさきの御もとにとま
 りて、なつげかたらひ給て、夜ふかきあかづき帰し給ふ。道に御思
 ひつまの象あり、門をたかせ給ふに聞つけねは、こえ有人して二
 かへりうたはせ給給ふ。源氏、朝ほらけ霧たつ空のまよひにも行
 過かたきいもか門かな、うちよりよしある下つかへをいたして、女
 たちとまり霧のまかきの通りくは草の戸さしにさはりもせし。神
 無月になりて、御手つからおはして御車にうちのせて、紫をぬすみ
 とり給へり。御めのとも紫の君も、とりあへすうづらひ給へり。
 〔和〕 さて、いひなえなと御心につくへきことをあつめて、かたら
 ひ付給ふ。源氏、ねはみねとあはれと思ふむさしの、霧分わぶら
 草のゆかりも、君もかき給へ。この給へは、おさなげにひさしくか
 きいてたまへり。姫君、かこつへきゆへをしらねはおほつかないか
 なる草のゆかりなまらん、たつ朝夕は、御ふところにてたてまこえ
 給ふ。

並 末摘花

源氏は、夕かほの上なつかしくうたかりし面かけのみ忘れたくお
 ほしめして、さもありぬへきわたりは「かた」御みとまり給ふに、
 御めの子に太輔の命婦とて内にさぶらふか申けるは、故常陸の宮
 のすえにまうけ給ひし御むすめ、心ほそきまにてのこり給ひし
 よし申出たり。きんをなつかしく引給ふと申せば、源氏、みつの友

- (1) いたり
- (2) のほり
- (3) 諸本、る給ふ
- (4) まかりて
- (5) あつて
- (6) あり
- (7) ナシ
- (8) ナシ
- (9) ナシ
- (10) ナシ
- (11) ナシ
- (12) ナシ
- (13) ナシ
- (14) ナシ
- (15) ナシ
- (16) ナシ
- (17) ナシ
- (18) ナシ
- (19) ナシ
- (20) ナシ
- (21) ナシ
- (22) ナシ
- (23) ナシ
- (24) ナシ
- (25) ナシ
- (26) ナシ
- (27) ナシ
- (28) ナシ
- (29) ナシ
- (30) ナシ
- (31) ナシ
- (32) ナシ
- (33) ナシ
- (34) ナシ
- (35) ナシ
- (36) ナシ
- (37) ナシ
- (38) ナシ
- (39) ナシ
- (40) ナシ
- (41) ナシ
- (42) ナシ
- (43) ナシ
- (44) ナシ
- (45) ナシ
- (46) ナシ
- (47) ナシ
- (48) ナシ
- (49) ナシ
- (50) ナシ
- (51) ナシ
- (52) ナシ
- (53) ナシ
- (54) ナシ
- (55) ナシ
- (56) ナシ
- (57) ナシ
- (58) ナシ
- (59) ナシ
- (60) ナシ
- (61) ナシ
- (62) ナシ
- (63) ナシ
- (64) ナシ
- (65) ナシ
- (66) ナシ
- (67) ナシ
- (68) ナシ
- (69) ナシ
- (70) ナシ
- (71) ナシ
- (72) ナシ
- (73) ナシ
- (74) ナシ
- (75) ナシ
- (76) ナシ
- (77) ナシ
- (78) ナシ
- (79) ナシ
- (80) ナシ
- (81) ナシ
- (82) ナシ
- (83) ナシ
- (84) ナシ
- (85) ナシ
- (86) ナシ
- (87) ナシ
- (88) ナシ
- (89) ナシ
- (90) ナシ
- (91) ナシ
- (92) ナシ
- (93) ナシ
- (94) ナシ
- (95) ナシ
- (96) ナシ
- (97) ナシ
- (98) ナシ
- (99) ナシ
- (100) ナシ

にて、今ひとくさやうたてあらん。との給ふ心は、琴時酒の三の友
 と云心也。いまひとくさとは、この姫君さけのみ給はうたてか
 らん也。八月十六日、いさよひの月さしいてたるに、命婦をさき
 まにつかはして、此姫君にきんとす、めさせて、源氏立きし給ふ
 あれはてたるを、あはれに「かた」見渡し給。とうの中侍、内より
 つれて出給けるか、ことかたに「いり給へは、あやしく思ひて、あ
 とにつきてうかひよりて、頭の中侍、もろともに大内山は出つれ
 と入かたみせぬいさよひの月、御返し源氏、里わかぬ影をみれと
 行月の入さの山と誰かたつめる。さてのち源氏此君にいひより給へ
 は、御いらへなかりしに、源氏、いくそたひ君かし、まにまけぬら
 んものないひそといはぬたのみに、この哥の御返しもこそければ、
 かたはらいたしと思ひて、姫君の御めのと子小侍徒、かねつきてと
 ちめんことはさすかにてこたへま「かた」うきそかつはあやなき
 とわがひたる声にて、入つてにはあらぬやうに聞えけり。源氏、い
 はぬをもいふにまさるとしりながらをしこめたまはくるしかりけり。
 かくてそのよよりあひそめ給へり、あやしく心えぬ御手あたりにおも
 はすにて、くやしとはかゝる事をやいふらん、雨ふるともかさやと
 りをたにせんとも、源氏思給けす、されとも此姫君は人の御ほとい
 とをしければ、見はてたてまつらんとはおほしけり、のちのあした
 の御ふみもたつかた有、源氏、夕霧のはる、けしきもまた見ぬにい

- (1) やみ
- (2) 八月十六日
- (3) ナシ
- (4) ナシ
- (5) ナシ
- (6) ナシ
- (7) ナシ
- (8) ナシ
- (9) ナシ
- (10) ナシ
- (11) ナシ
- (12) ナシ
- (13) ナシ
- (14) ナシ
- (15) ナシ
- (16) ナシ
- (17) ナシ
- (18) ナシ
- (19) ナシ
- (20) ナシ
- (21) ナシ
- (22) ナシ
- (23) ナシ
- (24) ナシ
- (25) ナシ
- (26) ナシ
- (27) ナシ
- (28) ナシ
- (29) ナシ
- (30) ナシ
- (31) ナシ
- (32) ナシ
- (33) ナシ
- (34) ナシ
- (35) ナシ
- (36) ナシ
- (37) ナシ
- (38) ナシ
- (39) ナシ
- (40) ナシ
- (41) ナシ
- (42) ナシ
- (43) ナシ
- (44) ナシ
- (45) ナシ
- (46) ナシ
- (47) ナシ
- (48) ナシ
- (49) ナシ
- (50) ナシ
- (51) ナシ
- (52) ナシ
- (53) ナシ
- (54) ナシ
- (55) ナシ
- (56) ナシ
- (57) ナシ
- (58) ナシ
- (59) ナシ
- (60) ナシ
- (61) ナシ
- (62) ナシ
- (63) ナシ
- (64) ナシ
- (65) ナシ
- (66) ナシ
- (67) ナシ
- (68) ナシ
- (69) ナシ
- (70) ナシ
- (71) ナシ
- (72) ナシ
- (73) ナシ
- (74) ナシ
- (75) ナシ
- (76) ナシ
- (77) ナシ
- (78) ナシ
- (79) ナシ
- (80) ナシ
- (81) ナシ
- (82) ナシ
- (83) ナシ
- (84) ナシ
- (85) ナシ
- (86) ナシ
- (87) ナシ
- (88) ナシ
- (89) ナシ
- (90) ナシ
- (91) ナシ
- (92) ナシ
- (93) ナシ
- (94) ナシ
- (95) ナシ
- (96) ナシ
- (97) ナシ
- (98) ナシ
- (99) ナシ
- (100) ナシ

ふせでさるまの雨かな 御返 未つむ花（44） はれぬ夜の月
 まつ里を思ひやれおなし心になかめせずとも 見なをしたてまつる
 事もやと、雪ふりつもりたまあした、すこしおすくして、はる／＼と
 とふみあけたる跡にもなき庭を、すこし出てもうともに見給へ、
 の給ふて、るさり出たまへまを、みぬやうにてしりめに見たまへは、
 まつるたけたかく、おほせながらに見えたまふ、かみのかゝりなどは
 いろいろつくしけに、たけにあまりてみゆ、御色は雪のはつかしくあ
 をきまてしろうし、あなかたはとみゆまものはななりけり、ことの
 ほか、たかくのひらかにて、さきかゝりて（に）とつけたまやうに「
（43） あかし、ふけんほさつののり物とみゆまを、なに、残りなく
 見ゆるらんと、くやくくさへおほさる、き給ひたるとさへいひ
 たつるは、ものいひさかなかれとも、うへにふるまのかはきぬのか
 うはしきまき給へり、ゆへある御しやうそくなれと、こは／＼しく
 みゆ、源氏、朝日さす軒のたるとけなからなとてつら／＼のむす
 ほゝるらん、松の雪のみあたゝかなるに、たちはなの木のうつもれ
 たると、御隨身してはらはせ給ふ、うらやみかほに、松の木のま
 のれとまきかへりてさとこほまも、波（44）す末の、とみゆ、門あく
 るおなのさむけにて、はしたなるおほき、おの、さのそんなに
 火をあやしきものに入て袖く、みにもたせたり、見給ひて、源氏、
 ふりにけるかしらの雪を見る人もおとらすめ、あさの袖哉、かく

- （43） 女（44） 未つむ花（45） とほぬ（46） にも（47） にも（48） は
 と（49） おおせな（50） おおせな（51） おおせな（52） かきり（53） せ（54）
 ナシ（55） あまをきまてしろうし（56） うらやみかほに（57） まつるたけたかく（58）
 に（59） ナシ（60） 源氏本、見つ（61） 源氏本、なけれ（62） 源氏本、と
 も、（63） は（64） （65） みゆる（66） （67） つから（68） （69） な（70）
（71） なみ（72） （73） 源氏本、おきな（74） （75） （76） （77） （78） （79） （80） （81） （82） （83） （84） （85） （86） （87） （88） （89） （90） （91） （92） （93） （94） （95） （96） （97） （98） （99） （100）

ともしも暮行に、正月一日の源氏の御しやうそくを見くましけにし
 なして、此宮よりたてまつり給、未つむ、から衣君か心のつらけれ
 はたもとほかくそそほちつゝのみ、源氏はいと心つきなしとおほし
 て、御文のはしに御手ならひに、源氏、なつかしき色ともなしに
 なに、この未つむ花を袖にふれけん、中たち申たまもかたはらうた
 くて、みやうふ、くれなるの一夜衣うすくともひた（44）、すらく
 になすをたてすは、御返は又の日ぞ有ける、源氏、あはぬよとへ
 たつる中の衣手にかさねていと見もしみよとや、又の日、紫の姫
 君の御もとにて、れいのゑかき色とり給とて、かみなかき女を給に
 かきて、はなに（に）をつけ給へり、又源氏の御はなに（に）をにつけて
 見給へは、よきかほたにみくるしきに、さらはこそおちね、との給
 へは、紫の上、さもやし、しみつらん、とあやうけに思ひて、よりて
 のこひたてまつり給へは、源氏、平仲かやうに色とりてへたまふな、
 あか／＼らんはあへなん、とたはふれ給ふ、平仲かそらなきとあ、
 こまは、平仲に女になくよしをみせんとて、つねにす、りのかめ
 の水をかほにぬりしと、女その水にすみとすりて入ぬ、平仲おもひ
 もよらす、れいのやうにかほにぬりたまをみて、女か、みとみせて、
 われにこそつらき心をみすれとも人にすみつくかほのけしきよ、と
 視し也、はしかくしのもとこのうはい、いととくさく花にて色つき
 わたりけり、源氏、紅の花をあやなくうとまま、梅の五枝はなつか

- （44） 女（45） 未つむ花（46） 源氏本、比（47） （48） ナシ（49） （50） （51） （52） （53） （54） （55） （56） （57） （58） （59） （60） （61） （62） （63） （64） （65） （66） （67） （68） （69） （70） （71） （72） （73） （74） （75） （76） （77） （78） （79） （80） （81） （82） （83） （84） （85） （86） （87） （88） （89） （90） （91） （92） （93） （94） （95） （96） （97） （98） （99） （100）

しけれと。かやうに尋ゆへ。未つむ花と巻とも女君をも名付たり。」
(公)

四、紅葉賀

神無月にもなりぬ。太上天皇五十になり給ふ年なれば、その御賀未
雀院にてありしと、紅葉の賀と申、もみちの頃なれば也。四十より
みてる年をいはふいのり也。藤つほの物見給ふまじき事を、御門心
もとなくおほしめされて、内裏にて、試案あり、源氏の中侍せいかい
はとまひ給ふ。青海波、あしふみ波の音に似たるゆへ、かくの名也。
源氏の舞、よのつねのまひあしふみおも、ちともみえず。御かほの
えならぬかざしとも、たとへんかたなし。みな人なみたきとおとし給
ふ。御「廿二」門はあまりゆ、しくおほされて、御いのりなとせさ
せ給ひけり。頭中侍舞のかたて也。これもきよけなれとも、源氏に
立ならひては、た、花のかたはらのみ山木とみゆ、まひはて、袖う
ちかへし給へるに、まちとりたるかくのまとはなやかに、御かほの
匂ひめもあやにみゆ。此まひにいりあやといふ事あり。まひはつる
ほときうなる舞の手也。事はて、源氏より藤つほへ、もの思ふに立
まふ、へくもあらぬ身の袖うちふりしころしりきや。めもあやなり
し御かたちありたまを見忍ひたまはぬにや。藤つほ御返し有「廿三」
から人の袖ふることは遠けれと立るにつけてあはれとはみき。青海
波はからのかくなればなり、かくて御賀の日は、未雀院にていろく

(56) 諸本の

- (1) 諸本、紅葉の頃なれば紅葉の賀と(2)とは(1)へ入リ、(3) 諸本の、(4) 廿三シ、(5) 廿三シ、(6) 物思ひ、(7) 廿三シ、(8) 廿三シ

の舞とも松風にいっきあひて、まことの太山嵐ときこゆ。木たかき
もみちのかげに、四十人のかいしろうのふきたてたるもの、音いひし
らす。源氏の御かざしのもみち散すまで、御かほのにはひにけとさ
れてみゆれば、左大侍御前の菊を折て、御かざしにさしかへ給ふ也。
内裏に、源内侍のすけとて、年五十七八の女房あり、やんことなく
心はせありて、あてにおほえたかくはあり、なから、いみし
ういうめいたる心さまにて、おもからぬ人あるを、たはふれにいひ
より給へるに、にけなき事ともおもはすうちとけたり、いつよりもしや
あま時、御門の御けつりくしに此内侍まいたり、いつよりもしや
うそくかたら花やかにみゆれば、源氏ものすきを引ならし給へるに、
かはほりのえならすまかきたるとさしかくしてみかへりたり、源氏
もちたまへる扇にさしかへて見たまへは、もりのした草おひめ
たり、よしある手にてあふきのかたつたに、もりのした草おひめ
れは、と書たり、引手「廿四」大あらしのもりのした草おひめは
こまますさめすかき人もなし、内侍、若しこはたなれの
こまにかりかはんさかり過たる下葉なりとも、御返源氏、さ、わけ
は人やとかめん、つとなく駒なつくめ森の木かくれ、はしはしら、
とうらみかけ申心す、つづくにのなからの橋のはし柱ふりぬま
身こそ悲しかりけれ、御門はみうちきはて、御さうしよりのすき
て御覽して、源氏のためにはうはなりとけらはせ給ふ、

(9) 太山あらし

- (10) 廿三シ、(11) 廿三シ、(12) 廿三シ、(13) 廿三シ、(14) やんことなき、(15) 廿三シ、(16) 廿三シ、(17) 廿三シ、(18) 廿三シ、(19) 廿三シ、(20) 廿三シ、(21) 廿三シ、(22) 廿三シ、(23) 廿三シ、(24) 廿三シ、(25) 廿三シ、(26) 廿三シ、(27) 廿三シ、(28) 廿三シ、(29) 廿三シ、(30) 廿三シ、(31) 廿三シ、(32) 廿三シ、(33) 廿三シ、(34) 廿三シ、(35) 廿三シ、(36) 廿三シ、(37) 廿三シ、(38) 廿三シ、(39) 廿三シ、(40) 廿三シ、(41) 廿三シ、(42) 廿三シ、(43) 廿三シ、(44) 廿三シ、(45) 廿三シ、(46) 廿三シ、(47) 廿三シ、(48) 廿三シ、(49) 廿三シ、(50) 廿三シ、(51) 廿三シ、(52) 廿三シ、(53) 廿三シ、(54) 廿三シ、(55) 廿三シ、(56) 廿三シ、(57) 廿三シ、(58) 廿三シ、(59) 廿三シ、(60) 廿三シ、(61) 廿三シ、(62) 廿三シ、(63) 廿三シ、(64) 廿三シ、(65) 廿三シ、(66) 廿三シ、(67) 廿三シ、(68) 廿三シ、(69) 廿三シ、(70) 廿三シ、(71) 廿三シ、(72) 廿三シ、(73) 廿三シ、(74) 廿三シ、(75) 廿三シ、(76) 廿三シ、(77) 廿三シ、(78) 廿三シ、(79) 廿三シ、(80) 廿三シ、(81) 廿三シ、(82) 廿三シ、(83) 廿三シ、(84) 廿三シ、(85) 廿三シ、(86) 廿三シ、(87) 廿三シ、(88) 廿三シ、(89) 廿三シ、(90) 廿三シ、(91) 廿三シ、(92) 廿三シ、(93) 廿三シ、(94) 廿三シ、(95) 廿三シ、(96) 廿三シ、(97) 廿三シ、(98) 廿三シ、(99) 廿三シ、(100) 廿三シ

此事人くおもひの外なる事といふを、れいの頭の中持きつて、い
 また思ひ「ゆゑよらぬ事よと思ひおとろきて、いひよりたり。中持
 は、いかにしてもかやうの事を見あらはして、のちのちの云あはせ
 にせん」と思ふほとに、うかひありきて、かくもんをもちやうの
 すきごとをも、たちをくれすいとみきこゆる人なり、夕立して名残
 すしきよひのまきれに、此ないし「琵琶」をもちしうくひきて、うり
 つくりになりやしなまし、とうたふ・山しろのこまのわたりのうり
 つくり、といふ心也。源氏もあつまやといふさいはらさうそぶきて、
 立より給へり、内侍は世の中をおもひみたれたるけしき也。内侍、
 たちめま、「好む、人しもあらしあつまやにうたてもかゝる雨そま
 き哉、源氏、人妻はあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれ
 しと思ふ、こよひはこのつほねにとまり給ぬ、頭の中持これとみ
 つけて、いとうれし、かゝる折にすこし源氏をおとしたてまつらん
 と思ひて、ねいり給ふを待つ、あらしくよりたれば、源氏は、
 ないしのもと「いつもかよふしゆりのかみかとおほして、御なとし
 をとりてひやうぶのうしろにたちかくれ給ふ、中持はおかしきとね
 んして、屏風をこほくとたみよせて太刀をひきめいたり、女も
 ニころ「好む、あはたしくあまゝく、あか君くと手をすりあ
 りくに、源氏は中持なりとみしり給て、おこかましくなりぬ、太
 刀めきたるかいなととらへて、いたうつみ給へり、中持はころひ

- (29) 源氏十シ
- (30) 源氏十シ
- (31) 源氏十シ
- (32) 源氏十シ
- (33) 源氏十シ
- (34) 源氏十シ
- (35) 源氏十シ
- (36) 源氏十シ
- (37) 源氏十シ
- (38) 源氏十シ
- (39) 源氏十シ
- (40) 源氏十シ
- (41) 源氏十シ
- (42) 源氏十シ
- (43) 源氏十シ
- (44) 源氏十シ
- (45) 源氏十シ
- (46) 源氏十シ
- (47) 源氏十シ
- (48) 源氏十シ
- (49) 源氏十シ
- (50) 源氏十シ
- (51) 源氏十シ
- (52) 源氏十シ
- (53) 源氏十シ
- (54) 源氏十シ
- (55) 源氏十シ
- (56) 源氏十シ
- (57) 源氏十シ
- (58) 源氏十シ
- (59) 源氏十シ
- (60) 源氏十シ
- (61) 源氏十シ
- (62) 源氏十シ
- (63) 源氏十シ
- (64) 源氏十シ
- (65) 源氏十シ
- (66) 源氏十シ
- (67) 源氏十シ
- (68) 源氏十シ
- (69) 源氏十シ
- (70) 源氏十シ
- (71) 源氏十シ
- (72) 源氏十シ
- (73) 源氏十シ
- (74) 源氏十シ
- (75) 源氏十シ
- (76) 源氏十シ
- (77) 源氏十シ
- (78) 源氏十シ
- (79) 源氏十シ
- (80) 源氏十シ
- (81) 源氏十シ
- (82) 源氏十シ
- (83) 源氏十シ
- (84) 源氏十シ
- (85) 源氏十シ
- (86) 源氏十シ
- (87) 源氏十シ
- (88) 源氏十シ
- (89) 源氏十シ
- (90) 源氏十シ
- (91) 源氏十シ
- (92) 源氏十シ
- (93) 源氏十シ
- (94) 源氏十シ
- (95) 源氏十シ
- (96) 源氏十シ
- (97) 源氏十シ
- (98) 源氏十シ
- (99) 源氏十シ
- (100) 源氏十シ

わらひぬ、源氏、なをしきんとお給ふと、中持つととらへてゆまし
 さこえす、ならはとて、中持の帯をときてしやうそくもぬかせん
 とし給ふに、ほころひはほろ／＼とたゆれば、頭の中持、つゝあめ
 る名やもりいてんひきかはしかくけころふる中の衣に、御返源氏
 かくれなきものとしまゝ、夏ころもきたるさうすき心とを見る、た
 かひにうらみなき「好む、すかたにひきなされて出給ひぬ、たかひ
 口かためて、又人にもらすなどの給ふ、又のあした内侍のもとよ
 り、おちとまりたるおひなとつゝみて、源氏の御かた「たてまつる、
 内侍、うらみてもいふかひはなきたちかかねひきてかへりしなみの
 名残に、中持のちとより、源氏の御はた袖をたてまつり給へる、御
 返しに、このおひをえさらましかはとおほしたり、源氏、あらたら
 し浪に心はさはかねとよせける磯をいかうらみぬ、中持のかた入
 おひにそへて、同、中たえはかことやおふとあやうさにはなたのお
 ひはとりてたにみす、中持、君にかくひき「好む、とられぬるおひ
 なればかくてたえぬる中とかこたん、石河といふさいはらにあり、
 石川のこま人におひとられてからきめをみる、いかなまかそのおひ
 はなたのおひの中はたえて、とうたふ、此ころをよめり、藤
 つほ此巻に若宮とうみ給へり、これはまことは源氏の御子なれとも、
 御かとは夢にも知たまはてかしたつき給ふ、源氏、いかさまにむかし
 むすへま契にてこの世にかゝる中の入たてて、御心しりたる女房

- (5) 源氏十シ
- (6) 源氏十シ
- (7) 源氏十シ
- (8) 源氏十シ
- (9) 源氏十シ
- (10) 源氏十シ
- (11) 源氏十シ
- (12) 源氏十シ
- (13) 源氏十シ
- (14) 源氏十シ
- (15) 源氏十シ
- (16) 源氏十シ
- (17) 源氏十シ
- (18) 源氏十シ
- (19) 源氏十シ
- (20) 源氏十シ
- (21) 源氏十シ
- (22) 源氏十シ
- (23) 源氏十シ
- (24) 源氏十シ
- (25) 源氏十シ
- (26) 源氏十シ
- (27) 源氏十シ
- (28) 源氏十シ
- (29) 源氏十シ
- (30) 源氏十シ
- (31) 源氏十シ
- (32) 源氏十シ
- (33) 源氏十シ
- (34) 源氏十シ
- (35) 源氏十シ
- (36) 源氏十シ
- (37) 源氏十シ
- (38) 源氏十シ
- (39) 源氏十シ
- (40) 源氏十シ
- (41) 源氏十シ
- (42) 源氏十シ
- (43) 源氏十シ
- (44) 源氏十シ
- (45) 源氏十シ
- (46) 源氏十シ
- (47) 源氏十シ
- (48) 源氏十シ
- (49) 源氏十シ
- (50) 源氏十シ
- (51) 源氏十シ
- (52) 源氏十シ
- (53) 源氏十シ
- (54) 源氏十シ
- (55) 源氏十シ
- (56) 源氏十シ
- (57) 源氏十シ
- (58) 源氏十シ
- (59) 源氏十シ
- (60) 源氏十シ
- (61) 源氏十シ
- (62) 源氏十シ
- (63) 源氏十シ
- (64) 源氏十シ
- (65) 源氏十シ
- (66) 源氏十シ
- (67) 源氏十シ
- (68) 源氏十シ
- (69) 源氏十シ
- (70) 源氏十シ
- (71) 源氏十シ
- (72) 源氏十シ
- (73) 源氏十シ
- (74) 源氏十シ
- (75) 源氏十シ
- (76) 源氏十シ
- (77) 源氏十シ
- (78) 源氏十シ
- (79) 源氏十シ
- (80) 源氏十シ
- (81) 源氏十シ
- (82) 源氏十シ
- (83) 源氏十シ
- (84) 源氏十シ
- (85) 源氏十シ
- (86) 源氏十シ
- (87) 源氏十シ
- (88) 源氏十シ
- (89) 源氏十シ
- (90) 源氏十シ
- (91) 源氏十シ
- (92) 源氏十シ
- (93) 源氏十シ
- (94) 源氏十シ
- (95) 源氏十シ
- (96) 源氏十シ
- (97) 源氏十シ
- (98) 源氏十シ
- (99) 源氏十シ
- (100) 源氏十シ

御返事申たり。王命婦、みても思ふみめ、いかに歎らん。こぞ世の人のまどふてふやみ、いまの若宮をみたまひて藤つほへ。源氏、よそへつゝみるに心はなく「ゆゑ」なまて露けたまふるなほてこの花、藤つほ、袖ぬる、露のゆかりと思ふにもなとうとまれぬやまとなてしこ。こゝろきてんの女御をこえて、^{紅卷}に藤つほきなきに立給へは、中宮と申けり。御こしの御とも申給とて、源氏、つきもせぬ心のやみにまどふかな雲井に人ともみるにつけても。

五、花の宴

ききらき廿余日に、御門南殿の格のえんせさせ給ひけり。ききき春宮の御つほねひたりみきにしてまうのほり給ふ。日いとよくはれて空のけしき鳥のこえも心ちよけなり。みこたらかんたちめ、みなたいて「ゆゑ」さくりて文つくり給ふ。源氏の君、春といふもしたまはれり。との給ふ御こえさへ、人にすくれ給へり。御心の中に藤つほ、大かたに花のすかたをみましかけ露も心のをかれましやは。舞とも教をつくしたり。春の鶯さへつるといふまひ、いとおもしろし。事はて源氏、藤つほわたりとわりなく忍ひうかひ給に。かたらふへき戸ロもさしてければとは、王命婦が戸ロなり。猶あらしに、こゝろきてんのほろ殿に立より給ふ。^{あつさういささ}三の戸のあきたるより、やそらのけりてうかひ給へは、おくのくま、戸あきたり。^{三の戸のあきたるより、やそらのけりてうかひ給へは、おくのくま、戸あきたり。}わかき世の、こえのなへてならぬか。

- (58) 中
- (59) 暗
- (1) 給ふ
- (2) けり
- (3) も
- (4) かたふ
- (5) ナシ
- (6) ナシ
- (7) ナシ
- (8) は
- (9) くま
- (10) けり

おほろ月よにしく物そ「ゆゑ」なきと口すさひて、こなたさまへあゆみいつ、いとうれしくて、ふと袖きとらへて、源氏、ふかきよの衣をきるも入月のおほろげならぬ契りと思ふ。女いと思ひかけすあやましく、こはたきとの給ふ。まろはみな人にゆるされた身也とのたまふ。こえを源氏とまきて、すこし心しつまりぬ。わかきけしきいとらうたし。そのよはかたらひあかし給ふ。ほとなくあけゆけは、こゝろあはたしく、なりの給へ。いかてかたつねたてまつらん。との給へは、女、うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらとほとはしと思ふ。源氏、いづれそと露のやとりをわかんまにこさ、かはらに風もこそふけ、扇をさしに「ゆゑ」かへてわかれ給ふ。頃も有明のころ、此あふきもえに木にうつしたる月なれば、此女君を有明の君とも、おほろ月夜の君とも云、扇に舟を書付てをき給へり。源氏、世にしろぬ心ちこそすれ有明の月の行衛を空にまかへて、いかにしてもたつねんとす。これは右大臣殿の六の君なり、春宮へ女御にまいらせんとかしつく人なり。やよひの末にみきのおとくに藤の花のえんあり。源氏のおそくおはしませは、左大臣、わか宿の花となへての色ならはなにかはさらうに君をまたまし。わたり給ひて、程なくさらえひしてさうしきを立給ひて、この人のおはするしんてん「ゆゑ」のみすのどにて、源氏、あつさういささの山にまよふ、戎ほのみし月の影やみゆると、をしあてにの給へは、えしの

- (10) ナシ
- (11) ナシ
- (12) ナシ
- (13) せ
- (14) ナシ
- (15) ナシ
- (16) の
- (17) せ
- (18) ナシ
- (19) まかせて
- (20) ナシ
- (21) 六条の宮
- (22) ありし
- (23) ナシ

はぬ成へし。女。心いさかたならませは弓はりの月なき空にまよは
ましやは。といふこゑ。たゞそれなり。うれしきものから

〔注記〕

底本 九州大学文学部蔵『源氏物語』

校合本 ㊦ 東北大学狩野文庫本『源氏無外題』

㊧ 天理図書館本『源氏無外題』

㊨ 天理図書館本『無抄』

㊩ 天理図書館本『源氏大鏡』

㊪ 鳥原松平文庫本『無外題』源氏抄

〔付記〕

諸本の閲覧・調査に御厚配を賜った各位に深謝申し上げます。

—— 福岡女子大学助教授 ——